

千曲川沿いの道を通ってある教会を訪ねた。洪水の痕跡はすさまじいが、それを抱え込む秋の美しさに陶然となる。自然の破壊力に圧倒され、創造のダイナミックな底知れなさに、思わず襟を正した。

「神は天を創造してこれを広げ、地とそこに生ずるものを繰り広げ、その上に住む人々に息を与え、そこを歩く者に霊を与えられる(イザヤ 42:5)」。流れゆく雲と高い空を創り、野や山に多様な生命を溢れさせていく神の業。そして私たちは、息(ruah)と霊(ruah)を与えられ、神の創造の証人になっている。

今ここで、私たちが生き、呼吸し、存在しているのは「神の息(霊)」による。このこと自体が何よりの奇跡ではないのか。私はここで、神の御手に抱えられ、導かれ、霊を呼吸している。

神の御手は途方もない自然として現れ、私たちはこれを耕し、収穫し、泣き笑いしている。暮らしに IT が組み込まれ SNS が張り巡らされようとも、私たちは霊を呼吸し、耕し、泣き笑いすることに変わりない。

「主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた(創世 3:21)」。神は旅立つ彼らに「皮の衣」を与え、自らをきり開かせる。

「主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた(3:23)」。人(アダム)は土(アダマ)を耕す(2:7)。つまり私たちの未知なる旅とは、第一に「自らを耕す」ことなのだ。

「人々に息を与え、そこを歩く者に霊を与えられる(イザヤ 42:45)」。道の途上で、与えられるのは神の息だが、私の呼吸。神の霊だが、私の霊となって神と響き合う(ロマ 8:16)。

ニコデモには学識と地位があり、謙虚で求道的だった(ヨハネ 3:1~2)。その反面、真面目一徹でイエスの角度がついた比喩が解らない。

「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない(3:3)」という言葉に対し、ニコデモは「もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか(3:4)」と答える。アホらしいほど四角四面な受け止めだが、人は、神の業に関してこうした勘違いをする。

「肉から生まれたものは肉であり、霊から生まれたものは霊である(3:6)」とイエスは言う。私たちは元来「肉(土)」から生まれた者。新たに「霊」から生まれる者は、「皮の衣」を着せられて自らの未知をきり拓いていく。

「はっきり言うておく、だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない(3:5)」と明確に語られたように、イエスは私たちに霊的な生き方を求めている。

「新たに生まれなければ(3:3)」、「水と霊とによって生まれなければ(3:5)」と言葉を換えて説明されても、ニコデモは言葉の表面的な意味に躓いてしまう(3:9)。いや本当は半ば気づいていて、無理解を演じているんじゃないか。

彼は信仰に渴き、危険を承知でイエスを訪ねたが(3:2)、己が地位(3:1)を手放せない。ニコデモのわざとらしい頑なさ、ジタバタしている彼自身の心そのもののように思える。

神は「人々に息を与え、そこを歩く者に霊(神の息)を与えられる(イザヤ 42:5)」。神の霊が与えられると私たちはどうなるのか。「見ることのできない目を開き、捕われた人をその枷から、闇に住む人をその牢獄から救い出す(42:7)」。

ニコデモは己の枷と牢獄を感じていたが、目を見開いて救い出されることに逡巡していた。闇の死の枷からも解き放つ、神の永遠の霊を目前に示されながら、薄い被膜を破れずにいた。

私たちはただ素朴に、ジタバタせず、自分を開いて、神の息と霊を自らの呼吸にしたい。



《おまけのひとつ》

牢獄でも 馴染んだ場がいいとジタバタしてしまうことは普通 誰でも自分は特別だがニコデモでも もういいんじゃないか 枷はすでに外され 皮の衣を着て 旅の支度は整っているのだから